

わが町牛深市は、県の元標から四百四十キロメートル隔てた天草下島の南端、熊本県で最も南の位置にあり、一衣帯水、鹿児島県の長島と相対し、茫洋たる天草灘を望んでおります。

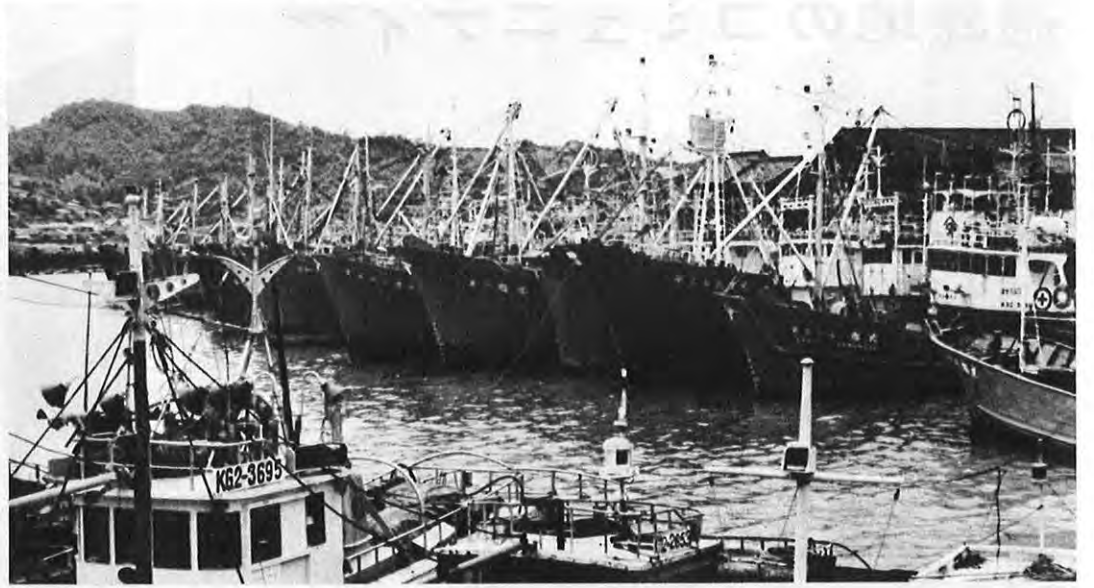
昭和二十九年七月一日に隣接五か町村が合併して市制を施行しましたので、今年でちょうど二十周年を迎えました。

古来牛深は天草島の中では、天草七浦の一つとして舟楫の采配下におかれ、小さな一漁村にすぎなかった。それが幕末の南蛮船の渡来、さらに海運業の隆盛とともに琉球、鹿児島、長崎を結ぶ中継寄港地として、同時に貿易品の集積地（九州各藩のいわゆる抜け荷扱い場所）として殷賑をきわめ、街並が整えられたといわれております。

いまもその名残りを白壁づくりの土蔵に見ることができ、そして牛深の代表的民謡「牛深はいや節」に往時の繁栄をしのぶことができます。

陸運の発達に伴う海運の衰退によって牛深も、もとの漁業の街にかえり、先達者によって漁船機関の導入や巾着網漁法をはじめとする新しい漁法の導入が図られました。

戦後昭和二十四年には長崎に次いで全国二位のいわし生産地として、林立する水産加工場の煙突はさながら「天草の大



▶県下最大の漁港である牛深港

阪」とも評され、全国から集まった仲買商人で街は活況を呈しました。そしてこのころの県税の八〇％が牛深市の水産業者の納税によって占められたそうです。

その後、魚介類の乱獲、海流の変化などから水産資源の減少が目立ちはじめ、沿岸漁業は衰微の一途をたどり、加えて石炭から石油へのエネルギー革命により、かつての天草無煙炭の産出を誇った市内五つの炭鉱の閉山、さらに「耕して天に至る」のかたちで営々ととなまされて来た零細農業など、昭和三十年代後半

農水産物の基地

牛深市

からのわが国の工業化とも相俟って、昭和二十九年市制施行当時三万八千人を数えた人口も年毎に流出の度を深め、現在ではかつての三分の二の二万六千人を割るほどに減少しております。そして熊本県内十一市の中でただ一つの過疎都市となっております。

従って現在の本市にとって、過疎対策が当面する最大の課題であります。

過疎化に伴って波及的にいろいろな問題が惹起し、これに対処しているところですが、いまこのすべてを述べつくことはできませんので、当面とり組んでいる

▼「とる漁業」から「つくる漁業」へ (栽培漁業)



▼かたくちいわしの水揚げ



▲牛深のひとつの象徴ポンカン園

一、二について述べます。

まず過疎化のほげしい地域への道路網の整備であります。道路の整備は地域住民の生活道としての支えであり、地域産物の流通と観光客の誘致導入が促進されます。

次に、集落の移転整備を進めています。牛深町から海上五キロメートルの位置に離島大島があり、この島にはかつて六十二世帯三百八十二人が住み半農半漁を営んでいましたが、現在はわずかに二十四世帯九十七人に減少し、しかも老人と子どもの島になり、まさに地域社会は崩壊の寸前にありますので、全島ぐるみで移転することになり、年内に移転を終わるようになっております。

過疎対策の決め手となるのは、やはり働き場所の確保と所得の増大を図ることにあります。

山が海に迫り狭隘な土地、保水力の乏しい地形と土質がもたらす水資源の不届、市場からの遠隔性など、企業立地に多くのハンディをもっています。

しかし反面「藍より青い」自然、日本列島の中で最も漁場価値の高いものとして最後まで残るであろうといわれている天草の漁場、年間を通じて温暖な気候風に恵まれた農業、これらの特性を活かし尽くすことが本市の活路であります。

昭和四十一年天草五橋が開通し島内道路も見事に整備されつつあります。そして今また長島本島と九州本土を結ぶ黒の瀬戸架橋が開通し九州西海岸ルートが新しいルートとして脚光を浴びようとしています。数々の史跡と風光明媚な国立公園、神秘性をもつ海中公園など恵まれたこのルートにおいて、かなめの拠点として本市のこれからの発展が約束されていきます。

また熊本県で最大の漁港である牛深漁港は、いま県営工事として第五次計画をもって四十億にのぼる漁港整備事業に着手し、九州西海岸における最大の漁業根拠地の造成を目指しています。

さらに「とる漁業」から「つくる漁業」の決定版として、栽培漁業センターがいよいよ着手されることになり、羊角湾総合開発事業による果樹園の造成とも併せて、農水産物のコンビナート造成に、いま着実なあゆみをすすめています。

青い空、明るい太陽、藍より青い海、白い砂、オレンジの丘、緑の山々そして跳ねる銀鱗、ハイヤ踊りの情熱が、牛深を明日の繁栄へとかり立てて行きます。

どうか県民の皆様、今後とも本市に対して一層のご愛顧と温かいご指導を切にお願いいたします。

(牛深市)